

細江カトリック教会だより

5月号

〒750-0016 下関市細江町1-9-15

☎083-222-2294

☎083-222-0970

ホームページ <http://hosoechurch.sakura.ne.jp>

復活節第3主日（4月26日）

ルカ24・13～35

終息の後に残るもの

日曜日に教会に行ってもミサがない状態がこれほど長く続くとは、一体だれが予想したのでしょうか。淡い期待がごとごとく裏切られ、聖週間も、復活祭も、信徒総会も、乙女峠祭も、すべて中止となった苦しい日々、果たして終わりが来るのでしょうか。たとえ新型コロナウイルスの感染が終息したとしても、この未曾有の災禍が人々の生活に、心に残した傷は容易に癒えることはありません。

しかし、負の遺産ばかりではありません。当然と思っていた日常性が奪われることで、当然と思っていたことがすべて大きな恵みであることに気づかされ、生きていくことに追われる中で、つい見過ごしているものが、神が与えると約束された変わることはない愛であることを、教えられているのかもしれない。

予定した記事が行事中止で集まらず、やむなく、ミサのために用意された御言葉のコメントを今回の「教会だより」に掲載することになりました。あらためて、人を生かす神の口から出る生きた言葉を深く味わうきっかけになれば幸いです。

作道 宗三 神父



4月の説教より

エマオに向かって歩く二人の弟子にイエスが旅人の姿で現れ、一連の出来事の意味を説き明かすなじみ深い話です。

二人の弟子は、期待したイエスが十字架上で亡くなり、自分たちが抱いた夢が破れ、すべては終わったと思ってエルサレムを離れます。その彼らにイエスは寄り添い、聖書を用いて、自分の受けた苦しみと死の意味を説き明かします。そして、「メシアはこういう苦しみを受けて栄光に入るはずではなかったか」と諭します。彼らの心は燃えませんが、まだ、完全には理解していなかったのかもしれない。

夕暮れになって、イエスは誘われるまま、宿に入り、彼らと夕食を共にしたとき、「賛美の祈りを唱え、パンを裂いて渡し」ます。そのとき、彼らの目が開き、それがイエスだと悟ったとルカは記します。

実は、これは、教会が今も、ミサの中で行っていることです。第一部で、割り当てられた聖書の箇所が朗読され、その説明を聞き、さらに、第二部で、人々の手に渡されたキリストの体となるパンをいただき、復活のイエスが今も、ともにいてくださることを、兄弟とともに体験するのです。

主イエスは、信じる民がこの世の旅路を生きる糧として、聖体の秘跡（聖体祭儀）を残されました。しかし、日本の多くの教会では、今、新型コロナウイルス感染症の拡大で、2カ月以上、ミサを共に捧げることのできない状態が続い

ています。先日、広島教区の白浜司教は、これを5月24日まで続けると言われました。歴史の中で、まだ、個人の人生の中で、この大きな恵みに与れない状況が生じることはまれではありません。それは、確かに辛い経験です。しかし、同時に、すべての恵みが神から来ること、命も健康も、家族も友人も、仕事も休みも、安全も平和も、すべて、神の賜物であることを、しっかり弁え、感謝する貴重な機会ととらえることもできます。

かつて、信仰の先輩たちが250年もの間、ミサも司祭も秘跡もない状態で信仰を守ったこと、さらに昔、砂漠をさまようイスラエルの民が、40年もの間、食べ物・飲み物も不足した状況の中で、エジプトから導きだされた神への信仰を深め、辛い日々を耐えたことを思い出しましょう。

そして、一日も早くこの感染症が終息するよう祈るとともに、特に、この時期、感染症に苦しみ病床に伏す多くの方々、彼らの治療介護のため、身を粉にして働く医療従事者のため、また、この感染症の影響により、仕事を奪われ、収入が減少して苦しむ人々のために祈りましょう。彼らに神が慰めを与え、ふさわしい施策が施され、人々の理解・協力のもと、皆が安心して生活できる日が訪れますよに。



5月の説教より

復活節第4主日
良い牧者の主日(5月3日)
ヨハネ10・1~10

ディン 神父

復活節第4主日のミサの福音では、

毎年、ヨハネ福音書10章から羊と羊飼いのたとえ話が読まれます。「良い牧者の主日」と言われますし、そこから、わたしたちの教会に良い牧者が与えられるように願う「召命祈願の日」とも言われるようになりました。現在には、どこに行っても、教区の神学生と司祭、また修道会の司祭・シスターの召命も本当に少なくなっています。ですから、もっと多くの司祭・修道者の志願者が派遣されるように、皆さんとご一緒にお祈りしながら、また、コロナウイルスの感染の状況が一日も早く終息しますように。

今日読まれた福音書の箇所はヨハネ福音書の10章1節から10節です。ヨハネ福音書10章は良い牧者である主イエスの姿を私たちに示します。この箇所を観想してみますと、私たちは、主イエスが弟子たちとどのような関係を持っておられたかが理解できます。それは、深い慈しみ、はかりしれない賜物を与える約束に基づく関係です。主イエスは言います。「わたしが来たのは、羊がいのちを受けるため、しかも豊かに受けるためである」(10:10)。この関係はキリスト者として私たちの関係と人間関係の模範となります。良い牧者である主イエスは私たちを導いてくださるだけでなく、ご自身が近づいてきて、一緒に歩いてくださいます。見失った羊のような私たちを見つけ出すまで捜し回ってください(ルカ15:4-6参照)。また、私たちのために命を捧げてくださいます。開かれた思いと心をもって主の言葉に耳を傾けましょう。それは、自分の信仰を深め、良心を照らし、福音の教えに従うためです。

それから、今日の福音書を読みますと、良い羊飼いは次のような三つの資格を持っていると示されています。一つは、羊のためにいのちを捨てることです。もう一つは、自分の羊を知って

いることです。最後に一つの群れになるようにその羊たちを導いてくださることです。このように、すべての牧者は良い羊飼いである主イエスに倣っていくわけです。使徒的勧告『福音の喜び』は次のような良い牧者を描きます。牧者は、「あるときは、皆の前を歩いて道を示し希望を支えます」。そして、「あるときは、気さくで情け深い親しみをもって皆の中にただあり、またあるときは、遅れを取る人を助けるため皆の後ろを歩かなければなりません」（31項）。皆さん、牧者たちがこのような者となりますように祈ってくださいませんか。

皆さん、今日の主日は「世界召命祈願の日」です。2020年「第57回世界召命祈願の日」にあたり、教皇フランシスコのメッセージは「召命についての語」について、次のように述べています。

「どの召命も、主がわたしたちに会いに来られるときの優しいまなざしから生まれます。主は、舟が嵐に襲われているときにこそ来てくださいます。それは、わたしたちの選択というよりは、主の無償の召し出しへの応答です」（聖ヴィアンネ没後160周年記念、教皇から司祭への手紙（2019年8月4日））。ですから、感謝に向けて心を開き、自分たちの人生を神が通っておられることが分かったなら、わたしたちはその呼びかけに気づき、受け入れることができるでしょう。

ですから、皆さん、良い牧者である主イエスが常に私たちが惜しみなく愛しているということを思い出して深く感謝しましょう。私たちも皆お互いに世話をするならば、ある意味で良い牧者となるのです。特に、現代においても多くの若者が主のみ声を聞き、それに応答して主イエスのように良い牧者となることができるように祈りましょう。

司祭の召命に奉仕する道を歩むすべての人（わたしを含めます）のためにお祈りをお願い申し上げます。



復活節第5主日（5月10日）

ヨハネ14・1～12

作道 宗三 神父

大型連休が終わり、一部には事業再開の動きもありますが、まだまだ油断のできない自粛の日々が続きます。そうする間にも教会は、もう復活節第五の主日を迎えました。

今日の第一朗読の「使徒たちの宣教」は、誕生して間もない教会が出会った困難の一つについて記しています。教会の中に、二つのグループができ、一方から不満の声が上がったのです。教会の発展に伴って、ユダヤ人からすれば外国人のような、ギリシャ語を話す人々から、自分たちが差別を受けているという不満です。今の日本の教会が経験している問題と重なります。無意識のうちに、少数派の人々が多数派によって疎外されていたのかもしれませんが。使徒たちは、この問題の解決のために、食事の世話をするにふさわしい人々—奉仕者（助祭）—を選んで、自分たちは御言葉の奉仕に専念することにした、と記されています。

ヨハネ福音書は、弟子たちのもとを去って行かれるイエスの思いを、長い説教の形で伝えています。「わたしは場所を用意しに行く」と。ただ運命に身を任せるのではなく、自らのしっかりし

た意志をもって、父の望まれる道を進まれます。人間が、自分の力に頼っている限り、決して行くことのできないその場所へ、イエスは道を開かれます。そして、言われます、「あなたがたはその道を知っている」と。イエスとともに日々を過ごし、イエスの言葉を聞き、イエスのなされたことを見ていた弟子たちは、それだけで、イエスが歩もうとされた道を知っていたはずです。しかし、トマスは言います、「わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか」と。そうです。まだ、わかっていないのです。イエスが苦しみを受け、十字架上でなくなり、復活して自分の姿を示されたとき、彼らははじめてわかるのです。苦しみを通って栄光へ、十字架を通して復活のいのちへ、それがイエスの歩まれる道、真の命への道なのです。

イエスはさらに言われます、「わたしを見た者は、父を見たのだ」と。イエスは、神について教えるだけでなく、文字通り、目に見える形で示してくださったのです。イエスご自身が神の姿だったのです。しかし、それがわかるためには、特別な目が必要でした。それは、信じるという目です。いくらイエスが神について語り、不思議を行い、病人をいやしても、信じようとしなない人々には、イエスの中に神を認めることはできません。イエスのうちに父を見るためには、信じること、つまり、自分の自由な意志でそれを受け入れる心が必要です。そして、それはまさに神のみが与えることのできる恵みです。この恵みに日々応えてゆくことができますように、そして、特に、この困難な時期に、信じることから来る真の希望に目覚めることができますようにお祈りいたしましょう。

愛のお米プロジェクト

「愛のお米プロジェクト」

東京のニャー神父さんが関東のベトナムの神父さん、シスターたちと立ち上げた「愛のお米プロジェクト」は、今生活に困窮しているベトナムの方々にお米と食料を届けるといふものです。小さい種から始まった活動が、全国から沢山の申し込みが来るようになり、ディン神父と私が協力を頼まれました。下関を拠点にして、広島から以西の西日本からの申し込みに対応して欲しいとのこと。

早速細江教会、彦島教会の信者さんたちが動いてくださり、5月のはじめに五十人分のセットを作り、送ることができました。コロナ収束まで、第二弾、第三弾と続いていくこととなります。今は宇部教会の片柳神父さんや、各教会の信者さんたちも協力し始めてくださっています。お米5キロと油、砂糖、カップラーメンなどを箱に詰めて送ります。食料の寄付や購入資金の寄付をくだされば大きな助けになります。

どうぞよろしく願いいたします。
労働教育センター 中井 淳 神父



*ご協力ありがとうございます！

